

旭川文学資料友の会

友の会通信  
第20号

発行・NPO法人 旭川文学資料友の会  
〒070-0004  
旭川市常磐公園 常磐館内  
電話(直通) 0166-22-3334  
FAX 0166-22-3334  
印刷・株式会社あいわプリント

## 所蔵展

「文人たちの墨蹟展」を見て

## 一人で行きたい場所

前田 恵

誰も誘わず一人で行きたい場所がある。それは常磐公園にある『文学資料館』だ。文学関係の企画展がある度に行くのだが、記憶をたどってみると、いつも一人で行っている。

十月初旬にも一人で行った。

資料館へ向かう時には中央図書館の裏口から常磐公園に出て、池を左手に見ながら散歩道をゆつくりと歩く。人口三十万人を超す都市の真ん中にありながら、静かで木々の多いこの公園が大好きだ。大きな銀杏の木や、たくさんある桜は、紅葉が始まっていた。芝生は色とりどりの枯葉の絨織となっていた。

小熊秀雄の詩碑の少し手前に、資料館への階段がある。資料館が入るこの建物は、以前は旭川市青少年科学館であった。子供が幼い頃に何度も遊びに来た、思い出いっぱい

所だ。建物は以前のままなので、この入口に来ると、すでに巣立った三人の我が子の事が思い出されて、ほっこりとする。

資料館では『文人たちの墨蹟展』という企画展が開かれていた。静かな展示会場に、足を踏み入れる。

整然と飾り付けられた、たくさんの短冊と色紙。高浜年尾の掛け軸が最も目を引く。ゆるやかな筆線で書かれた文字は美しく、句の雰囲気や良さを表している。山口青邨、北原白秋、小田観堂などの高名な俳人や歌人の短冊、平野威馬雄や井伏鱒二といった、有名作家の色紙も並んでいた。直筆原稿も多くあった。芥川比呂志、高橋義孝、深尾須磨子、などの原稿は興味深かった。

これを旭川で見られるとは、なんと幸せな事か、と思う。私が、有名作家の直筆原稿に触れたのは、確か神奈川近代文学館だったと思うが、それもほんの十年ほど前のことだ。北海道の片田舎にいたら、そういう機会はめったに訪れない。

以前から、この資料室の展示を見る度に、「えっ、この文人のこんな写真もあったのか」「この作家の直筆もあるのね」と、驚き感心し

てきた。いったいどれ程の資料を所蔵しているのか、測り知れないように感じていた。今回は七十人の作家の、三百点もの作品が並んでおり、いよいよこの資料館の底力を見せて貰った気がした。

最後に二階の展示室で、大好きな小熊秀雄の写真をつくりと見て、外へ出る。思わず満足の溜息が出た。

これからも文学資料館へは一人で行こう。



## 詩画展の周辺

(十一月一日〜十二月十六日)

学芸員 沓澤章俊

毎年開催している旭川詩人クラブによる詩画展。今年は三十一回目で、計十三名の会員の作品が展示されています。各人魅力的な詩と絵の世界を展開しています。共通展示コーナーのテーマは「橋」。旭川は「橋」の街。この文学資料館を出てすぐ目に入るのは、旭川を象徴する「旭橋」。この街にふさわしい詩作品と絵が並びました。

十一月七日(火) 十三時半からは、イベント「講話と『詩と遊ぼう!』」を実施しました。講話は「詩との出会いから『ななかまど』のあたり」と題して、旭川詩人クラブ副会長の森内伝氏<sup>もりうちづた</sup>にお話しいただきました。

森内氏は昭和十二年樺太生まれ。戦後引き揚げてきて江丹別に入植してからの子供時代の苦労。水道、電気のない生活の中での開墾作業。栄養不足、困窮、無理な労働から結核にかかり、昭和二十八年に旭川赤十字病院に入院したこと。同じく入院していた江原光太主宰の「緑蔭」に入り詩を書くようになったこと。その後「新人文芸」「文学道場」を経て「青芽」に所属。昭和三十七年、墓碑銘のつもりで発刊した唯一の詩集『ひとり旅』のこと。昭和四十七年から昭和五十六年まで、旭川発行の詩誌「ななかまど」を主宰し、その頃の旭川の

詩界のようすなどもお話しいただきました。

後半は、森夏生氏の担当で「詩と遊ぼう!」。「ぶどう」「冬囲い」「初恋」。これらを題目として即興詩をつくる遊びです。制限時間は二十分間。各人各様の詩が出来上がりました。それを、作者が一人ずつ前に出て朗読。即興といえど、完成度の高い作品が多かったです。

これからのことですが、短歌や俳句等のグループの方々も、このような企画展をこの文学資料館で開催されたら、面白いのではないかと思います。次第です。



講話と「詩と遊ぼう」11月7日 講師の森内伝氏



詩画展会場



詩画展会場



## 想いを寄せて

佐藤 真理

八月下旬、友人と札幌、小樽旅行へ出掛け私は久しぶりに旭川まで足を運んでみた。是非、この機会に常磐公園、中央図書館、旭川文学資料館へ立ち寄りたいという懐しい気持ちで向かうことにした。旭川駅周辺は、とても近代的に整備されており、以前の面影はなく驚いた。

一九九四年、父が小熊秀雄賞を受賞させていただいた後、母と旭川市を訪問し、当時の市長さんや岡田先生、中央図書館の館長さんや関係者の方々へ、ご挨拶することができた。その際も旭川の皆様の丁寧な対応に心温まる気持ちになったことが思い出される。

文学に縁遠い私であるが、受賞作品となった「俗名の思想」は父が書いた作品の中でもとても印象強く、何度も読み返したことがある。月日が経ち、旭川市へは二十年ぶりの訪問となったが、事前に連絡もせずに立ち寄りさせていただいた中央図書館では、「小熊秀雄賞四十年の軌跡」の資料等の紹介、旭川文学資料館では、学芸員の沓澤さんが小熊秀雄賞の歴史や歴代の受賞作品の展示場所へ案内してくださり、更に詳細についても説明を受けることができた。東館長さんをはじめ、ボランティアの方々や関係機関の継続的な協力と支えにより、維持、管理されていることにと

ても感心させられた。小熊賞の奥深い歴史と旭川市の様々な景色を目にすることができ、有意義な時間を過ごすこととなった。皆様に心より感謝申し上げます。

(筆者は小熊賞二十七回受賞佐藤博信さんのお嬢さん)



小熊秀雄詩碑の前で(常磐公園)

## 昭和の生活資料雑貨展

(十二月二十六日〜二〇一八年二月二十八日)

百井昌男

戦前・戦後の史料を中心に展示し、その年代を過ごして生活してきた人には、その人の思い出を、戦争を知らない世代の人には、その当時の史料を見ることによってその時の生活の様子を理解していただき、何かを感じとっていただければと思います。戦前からの生活史料や用品を展示します。見に来てよ

かったなあという展示にしますので是非来ていただければ幸いです。

駅のホームの  
立ち売りのお茶



飯ごう



うちわ(団扇)



日常生活で使用されたものであり、企業等の広告によるものが多く、これは、日本を象徴する富士山や日の丸が描かれている。

**配給券はさみ**  
生活に必要な、衣料品や食料品を購入するために保存する配給券はさみで、進め頑張り掛け敵をとどめさす日の最後まで。中には、うっかりせずにしつかりはたらけの標語があります。



**貯金通帳**  
戦時色の濃い様々な種類の通帳があり、・護国・貯蓄・家族・工場・児童・国債・国民・積立・愛国・報国・普通・當座・郵便等の貯金通帳があります。



### 陶貨

終戦1年前の昭和19年物資の不足に伴い、瀬戸を使って10銭・5銭・1銭の陶貨を造ったが、間もなく終戦を迎えたため、一度も使われることなく壊された。



### 茶筒

昭和40年頃までは、お茶の購入時には、紙袋に詰めてあったが、袋入りは湿るのでブリキ缶等に入替えたが、これは木製で“弾丸”の形をしている。



### 投砂弾

砂を詰めて備えておいた「投砂弾」で、空襲により火災が発生した時火の中に投げ込んで消したがあまり効果がなかったとのこと。



### 伝单(空襲予告)

空襲予告で厭戦気分や不安を高めようとして米軍がB29からばらまいたもので、子供には毒が塗ってあるので拾わないように親が子供に注意した。紙の爆弾ともいわれた。

## 来館者ノートから

①

私、久々に文学資料館に行ってきました。本当に何も変わってなかったようでした。今度資料館展示修了の際にはNHK旭川放送局所蔵の常磐公園や冬まつり関連の貴重映像が見られるコーナーを設置して欲しいということを希望します。

(八月十九日 井沢義治)

旭川シニア大学四年生研修。初めて訪問いたしました。素晴らしい旭川の財産だと思います。(八月二十四日 加藤)

高校時代に古文を教えて頂いた佐藤喜一先生にお会いできなつかしく思い出しました。(八月二十四日)

「札幌の映画」という本を手に取り、高校時代・独身時代に観て感激した題名、写真を懐かしく見て(読んで)昔の若い頃の思い出がよみがえりました。(八月二十四日 鶴飼)

久しぶりに訪れたのですが、落ち着いた良い感じの展示になっていて、市民の一人としてうれしいです。(八月三十日 笠原敦子)

前回の東高の生徒さん方の俳句を見せていただきました。先輩として一言と思っただけですが女性客が後からどつと入ってこれたので記入するのをやめました。私は東高の前身の旭中、旭高の卒業生で、在学時は文芸部に所属していました。当時の機関誌は「どろの木」という名称でした。現在は八十六歳の老人ですが、懐かしく展示物を見せたいと思いました。高校時代に少しもどつたような気持ちでした。ありがとうございます。(九月七日 N)



有島武郎の晩年 — 未完のままで —

## 『運命の訴へ』から—

片山 礼子

ここ数年、有島武郎の晩年が気がかりである。『運命の訴へ』(大正九年九月)を書き始めた当初は、長編小説と考えていたようだが、結果的に未完成のまま、中断した形で作品が残されている。この作品は、『星座』(大正十年七月)と共に、『運命の訴へ』は取り上げられても、近年ではほとんどタイトルのみで、次第に作品の存在そのものからも遠のいていることも否めない。

さて、この作品の内容だが、こんな一文から始まる。

こんな事々しい表題は、私が仮初めの思いつきからつけたもので、この記録の筆者には迷惑なことであるかも知れない。

さて、『運命の訴へ』が、なぜか次々に起こる忌まわしい出来事。それは現実の生活に追い打ちをかける想像を絶する内容である。

当然、有島武郎が『運命の訴へ』の執筆の当时には、作品の全体構想なり、意図もあったはずである。ところが、書き進めていく中で、思うようには筆が運ばず、とどこおってしまう。

このことは、有島自身が、九月六日付、粒良達二に宛てた書簡からも窺われる。

特に、『惜しみなく愛は奪う』以降の武郎の作品に注目してみると、長編では『運命の訴へ』、『星座』が浮上するが、いずれも未完のまま中断している。

大正五年八月に、妻・安子を、同年の十二月には、父・武を失うことは武郎にとつての大きな転機でもあったであろう。

これまでの有島武郎創作活動からすると、晩年期における有島武郎のそうした状況に対して、無関心ではいられない。

終生、様々な出来事に悩み抜いた作家の一人として、武郎が掲げた理想郷、未来郷とは、これまで以上にその関心度は深まった。

大正九年に『惜しみなく愛は奪う』で武郎は「本能的な生活」、「知的な生活」、「習性的な生活」をあげた。この中で最も理想としたのは「本能的な生活」であった。それは、二元化から一元化の道である。ここで、武郎の理想は完結したかにみえた。しかしながら、あくまでも理想は理想として、自身はそうであることを求めたにも限らず、十分に徹することができなかったことも理由としてあげられよう。

「二律背反」、理想と現実、葛藤の中で生きた作家として、武郎の作品『運命の訴へ』が未完成のまま中断したことも当時の武郎の置かれている状況ともかわっていることであろう。

まだ、明確な結論にまで及んでいないが、

一連のそれらの作品から武郎の晩年が少しでも見えるのではないかと考える昨今である。

片山礼子さんの著書



# リレーエッセイ

## 東トルコの旅

松井 芳

「古代から様々な民族が行き交い、幾多の文明の興亡の舞台となった北メソポタミア」という説明文に誘われ、東トルコの旅に出たのは四年前のこと。

ユーフラテス川とチグルス川の源流であり、シルクロード、旧約聖書の舞台でもある地域なら、当然のように惹かれた。

ツアーは、シリアに近いガジアンテップから始まった。

この旅行で何より楽しみにしていたのは、世界最古といわれる「ギョベックリ・テペ」の神殿遺跡だった。一万年からの幾つもの神殿があり、発掘が続いていた。周辺には、この時代の集落跡は見当たらないという。

狩猟採集時代に築かれた謎の多い遺跡である。そこに自分が居ると思うと、この時空に感動する。

ネムルート山で日の出を見る行程では、休憩所から三十分程と言われたのに、登山をしたことのない私は、健脚な人たちより相当遅れて山頂に辿り着いた。

朝日を受けて輝くのは、地震で神体から転

げ落ちた神々の首。ゼウス・アポロ・ヘラクレス、そして山頂のピラミット墳墓の主、アンテコス一世の彫像だった。

シリア、イラク、イラン、アルメニアの国境地帯を行くと不思議な気分になる。すぐそこに国境警備の見張り台がある。それほど広くない川で国を隔てている。目の前にマルコポーロの渡った橋がある。刻まれた歴史や、行き交った民族を感じながら、バスで巡った三千キロ余りは本当にわくわくした。

だからこそ、混迷するシリア、イラクに接し、クルド人が多く住むあの辺りの現在が、気になっている。



ギョベックリ・テペ

## 「長兄と私の名前」

山田 勝子

おとしのこと、テキサス州在住の姉から「戦後七十年の節目に、太平洋戦争について身近で感じることを、戦いにまつわる写真等をお知らせください、というニューヨークテレビジャパンNHKの公募に採用されたのよ。アメリカの懐の広さ、屈託ない人達に出会い望郷の念は薄くて、子、孫と共に恙なく生活しながら、生まれ育った自国の人々と、この愛ある人々が戦った事実は、本当だったのか、血涙を踏み越え、志願した七つボタンの特攻訓練服姿の長兄の写真と共に平和への願いを綴った」という。

「四十年前に日本を離れたので、後の長兄の様子を教えてあげて」が電話の内容だった。程なく彼の局から、放映案内と共に、長兄の近況と写真などを承知したい旨丁寧な要請があった。綿津見の藻屑となるは覚悟のうえだったろうが、時の采配有無で命を拾った。姉から電話の前年、長兄から津軽弁の電話、「さくら祭りさ来い俺の達者なうちになあ」

余命を告げられ在宅療養を希望していた。心配気な私に「俺は未だ未だ弱わらねえ、そこさ座れ」穏やかな八十九歳の横顔だ。

「俺の出撃前、僅かに許された帰郷時に父の任地先でお前が産まれた、母は産床から、おやじ「どうしても征くのか？止めぬのか？お前は頼り





兄の写真

の長男で下に、七人の姉弟がいるのに」俺は、「その者等守る為にだ。ズボンの裾をつかむ母の手を振り払った」

涙眼で「せめてこの産子に名前を付けてから征け」と。「俺はお前に勝子と名付けたのだ。朋輩達と日本は負けるはずはない、皇軍の花は散るもの、と信じ込もうとしていた、命惜しむな女々しい心根では故郷の両親が悲しむだろうと、殴られるよりつらい情に訴え諭す上官、正義の戦争は無い」強い口調。「奮のままで散った勇士達は、優秀だった」

私は、長兄最後の桜祭りでの写真と、戦争は作られるの言詞を添え、局へ寄せて頂いた。

後日、ニューヨークウェブサイトで放映された。幼げ残る純粋な若き憂国の士を視た。

我を無にさせる教育の凄まじさをみた。

母は、病を持つての出産、一滴の母乳も含ませず、長子の延命も覚え八人の子を残し逝った。私の名前は心の風雨にもめげない。兄弟の敬慕を集めた長兄は岩木山麓に眠る。

## これからの企画展

「源流」五十周年記念俳句展

(平成三十年三月十三日～四月二十一日)

### 源流俳句会のことなど

石川 北辺子<sup>ほくへんし</sup>

私共の句会が「源流俳句会」として旭川で声をあげたのは平成十五年のこと、それ以前は「雪垣俳句会」としてこの句会は存在していた。元をただせば氏家夕方、榊原雪穂子、澤田潤生氏等によって昭和四十三年に発足した「神楽俳句友の会」がこの会の原点である。

地方の俳句会が発足した場合、多くの場合「師系」を名のるが当句会は特に師系なるものを名のっていない。師系を名乗ることにより、いろいろな制約を受けることもあるが、この句会はその点気楽な句会である。昭和から平成時代にかけて約五十名の会員を擁し、四ページ程の

会誌を毎月発行し、月の例会も欠かさず実施して来たが、主要メンバーの死亡に



2017年秋231号

より会誌の発行は二百号をもって停止していた。平成二十二年より会誌を復活、現在三十一号を数えている。会員も道外及び道内有力誌の中堅同人及び会員が多く誠に力強い。

明年は当句会設立五十周年の記念すべき年に当るため、それにふさわしい記念事業を考えている。まず、その一つが合同句集の発行、合同句集は平成十五年第七号の発行で止まっている。そしてもう一つは源流俳句会合同展の開催である。合同展については平成二十九年五月市内喫茶店ギャラリーで既に開催済であるが、今度は旭川文学資料館の一室をお借りする手配が済んでおり、どう進めるか考慮中である。会員相互の良きアイデアを期待している。

### 来館者ノートから ②

・元、旭川市民ですが、帰省の際にはじめて訪れました。こんなにゆつたりと展示を見られる場所とは知らず、旭川市民だった頃も通えばよかったと思いました。

(九月十五日 堀下)

・初めて訪れましたが、この様に資料を保存していただくため、私どもが文学の軌跡をたどることが出来感無量です。また、参りたいと思いました。ありがとうございます。

(九月二十七日 美)

・初めて訪れました。少し見る時間が足りなかったけど、好きな文人の方の作品が見れてよかった。

(九月二十九日)

・正直驚きました。素晴らしい、資料の豊富さと管理状況が良い。特に、直筆原稿の多様さに。

(十月三日 堀口)

## 資料館だより

## 出版案内



エッセイ  
『短歌の周辺』

西勝 洋一



歌集  
『そして、春』

柊 明日香



エッセイ

『北海道の森林鉄道』

松野郷俊弘



詩集  
『黒本』

柴田 望



詩壇史  
『続・旭川詩壇史』

東 延江

## 受贈図書・資料

(二〇一七・六・一〜十・末)

・江藤 彩華 『鷹栖村史』他四十八冊  
・西岡寿美子 詩誌『二人』、詩集『シバテンのいた村』、エッセイ集『よしなしごと』

・柊 明日香 歌集『そして、春』

・坂井 信夫 詩集『渇きと眠り』

・津坂 治男 詩集『花・マイちゃん』

・藤田 民子 詩集『少女の家』

・西勝 洋一 詩集『少女の家』

・松野郷俊弘 詩集『北海道の森林鉄道』

・柴田 望 詩集『黒本』

・佐相 憲一 詩集『森の波音』、エッセイ集『バラードの時間』

・永江 朗 詩集『菊地君の本屋』他四十九冊

・岡和田 晃 『世界にあげられた弾痕と、黄昏の原郷—SF・幻想文学・ゲーム論集』他

・横川 敏晃 「新潮」、「海」他句集、雑誌三十七冊

・山口 弘 井上靖『化石』他十冊

・入谷 諭司 『兵村』(板東三百)他著書、雑誌、その他二二冊

・栗田 和成 『今の生の中国に触れた』

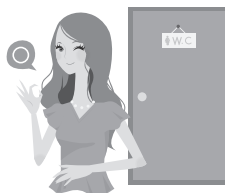
・中條 愛子 三好文夫油絵一点、花瓶二点

・他百井昌男、十河宣洋、富田正一、前田恵、東延江の各氏から資料、俳誌、詩誌等多くの

寄贈を受け、雪華俳句会、旭川歌人クラブ、かぎろひ詩社、ときわぎ川柳会、旭川詩人クラブなど旭川を発行元とする詩誌、歌誌、俳誌川柳誌は発行のつど寄贈して下さり心よりお礼申し上げます。

## お知らせ

大変ご不便をおかけしていましたが、この度、二階女子トイレに洋式トイレが付きましましたのでご利用ください。



## 編集後記

今年もわずかになりました。十一月中旬常磐公園の池に鴨が数百羽いました。寒い日でしたが、空も空気も水も動くものがなく、浮いている鳥も動かないでじっとしている情景に見とれました。

絶えず動き変化していく時間の中の静寂のひとときを鳥たちも満喫しているようでした。

数日ではもとの風景に戻っていません。友の会通信二十号をお届けします。今号は写真を多く入れてみました。ご意見等を頂ければ幸いです。

(十河)